

# 学内六報

2026.2.20

no.1603



上野英三郎博士とハチ公像レプリカ 1/6サイズ



## 浮体式洋上風力と宇宙資源開発

—2つの新たな連携研究機構とは?

加藤登紀子コンサート記念対談

## 「安田講堂の歴史と未来」

大学で人気の本と出会うVR空間も登場

HMCと東大生協のコラボが進展中

# 浮体式洋上風力と宇宙資源開発

—2つの新しい連携研究機構がフロンティアを拓く

浮体式洋上風力エネルギーと  
関連技術国際連携研究機構  
(UT-FloWIND)とは？



FとWを風車と海のイメージに重ね、東大カラーで象徴的に表現したUT-FloWINDのロゴ。

<https://fwind.k.u-tokyo.ac.jp/>

## 知を束ねて“日本モデル”を

本学にはこれまでも浮体式洋上風力に関わる優れた研究が点在していましたが、**大学としての“統一した顔”を十分に示せていない**という課題がありました。政府が洋上風力を脱炭素の柱に位置づけるなか、「東大としても、より一体的に社会へ応えるべきだ」という気運が高まりました。産学協創推進室副室長の吉村忍先生からの後押しもあり、機構の創設に至りました。

私は本来、浮体式洋上風力の専門ではなく、CCS<sup>\*</sup>の海洋環境影響評価などの研究をしてきました。しかし所属の**海洋技術環境学専攻には浮体運動やシステムエンジニアリングの専門家が揃っており、若手の先生方に相談すると「ぜひやりましょう」と力強い声が返ってきました**。私は橋渡し役として、分散していた専門性を束ね、次世代へつなぐ枠組みづくりを担っています。

産業界との協働も進んでいます。電力系のFLOWRA<sup>\*</sup>、建設系のFLOWCON<sup>\*</sup>とは早い段階から意見交換を重ね、「産」の課題と「学」の技術を結ぶ基盤が整いつつあります。複数部局が参画する運営委員会では議論が白熱し、多様な知を束ねる難しさと同時に大きなやりがいを感じています。

日本で浮体式洋上風力の研究が不可欠なのは、地形と気象条件による必然です。**日本の海は沖合が急深のため着底式には不向きで、台風や荒波といった厳しい環境でも安定稼働する仕組みが求められます**。風車制御や大水深での係留、建造・運用・保守の効率化など、**日本の海に適した「日本モデル」の構築が欠かせません**。漁業との共存を見据えた海洋空間計画や社会的受容性の研究も、大学が果たすべき重要な役割です。

今後の基盤となるのが「海洋DX」です。

洋上設備から得られる膨大なデータを解析し、気象・海象の予測精度向上や運用最適化につなげる取り組みは、情報科学やAIとの連携が不可欠です。**海はデータの宝庫であり、異分野が交わることで新たな価値が生まれます**。

## 博士人材育成と国際連携に注力

本機構で特に力を入れたいのが博士課程教育です。産業界と共同で研究プロジェクトを設定し、基礎から実装までを牽引する**「研究もビジネスもわかる博士人材」を育成したい**と考えています。日本の再エネ産業を支える基盤づくりとして、大学院教育に新しいモデルを提示できるはずです。

国際連携も重要です。例えばノルウェーは北海油田で得た資源を研究へ積極的に投資し、ノルウェー科学技術大学は浮体式洋上風力の先端拠点の一つとして世界をリードしています。**日本は資金面では厳しい状況ですが、研究開発力では遜色ありません**。補完し合える両国で、ぜひ連携した研究開発を進めたいと考えています。また、私が長年関わってきたブラジルには、サンパウロ大学に海洋技術イノベーションに関する新たな研究センターができ、浮体式洋上風力はもちろん、深海掘削・CO<sub>2</sub>貯留などに関する共同研究が今後期待されます。また、海底油田開発において、現地で活躍する東大出身研究者の存在も心強いものです。

この春には機構として初のキックオフシンポジウムを予定しています。海洋は今も多くの発見の余地を残す領域。情報・IT、環境、生物、政策、国際協力など、幅広い専門が求められます。**UT-FloWINDはいつでも門戸を開いていますので、ぜひ多くの研究者に参加していただければ幸いです**。



佐藤 徹

UT-FloWIND機構長  
新領域創成科学研究科教授



2023年、国土交通省が企画したノルウェー・スコットランドの視察時に撮影した浮体式の風車。



浮体式洋上風車の係留挙動を解析する水槽実験の様子。海洋環境での動的応答を可視化します。

\*Carbon Capture and Storage：CO<sub>2</sub>の回収・貯留 \*発電事業者が運動した「浮体式洋上風力技術研究組合」 \*建設業界が中心の「浮体式洋上風力建設システム技術研究組合」

2025年10月、東京大学に新しい連携研究機構が2つ発足しました。次世代エネルギーとして注目が高まる浮体式洋上風力の研究開発を推進する機構と、地球の外に広がる多様な宇宙資源の探査から利用までを総合的に研究する機構です。初代機構長を務める2人の先生に、機構の使命、設立の背景、国際連携や教育活動の展開などについて紹介していただきました。

#### 連携研究機構とは？

既存の組織の枠を超えた学の融合による新たな学問分野の創造を促進するため、複数の部局等が一定期間連携して研究を行う組織（連携研究機構）の設置が2016年度から始まりました。現在、全学で46の機構が活動しています。

## 宇宙資源連携研究機構 (Center for Space Resources and Innovation, CSRI) とは？



**CSRI**  
Center for Space Resources and Innovation

地球（青）・月（グレー）・火星（オレンジ）・小惑星をモチーフに、宇宙資源研究の広がりを表現したCSRIロゴ。  
<https://csri.u-tokyo.ac.jp/>

### 地球外資源を文明に生かす

地球上の資源や環境が有限であることを踏まえると、**文明を持続させるためには新しい発想が求められます**。そこで注目しているのが、月や小惑星といった「地球外の物質をどう活用できるか」という視点です。地球は重力が大きく、宇宙へ出るには莫大なエネルギーを必要としますが、低重力の小惑星ではごくわずかな力で移動できます。**宇宙で必要なものを宇宙でつくることできれば、地球環境への負荷を抑えながら文明を支える道が開ける……**。こうした発想から、CSRI設立に至りました。

このテーマは科学技術にとどまらず、制度・倫理・社会の視点も欠かせません。東大には科学や工学に加え、法学、経済学、倫理など多様な研究者が集まっており、**地球外資源の利用に伴うELSI<sup>\*</sup>を多角的に検討できる点は、本機構の大きな強み**です。

国際協力も広がっています。昨年11月、アメリカ・ヨーロッパ・オーストラリアの宇宙資源関連拠点と国際シンポジウムを開催し、世界四極によるグローバル・アライアンスを形成することで合意しました。JAXA（宇宙航空研究開発機構）の**はやぶさシリーズや小型月着陸実証機（SLIM）等の成果が世界的に評価されている**こともあり、日本の取り組みへの関心の高まりを強く感じます。国際的なルール形成や技術標準化を見据えた、重要な第一歩となりました。

宇宙資源という新しい領域では、どの国も確立したモデルを持っていません。だからこそ、**基礎科学から工学、政策まで連携し、段階的に実現性を高めていく姿勢が重要**です。日本の“地道だが着実な積み重ね”は、この分野でこそ真価を発揮できると考

えています。

CSRIの活動は宇宙戦略基金事業のSX研究開発拠点として支援されています。地球外資源の「探す・取り出す・分ける・貯蔵する・使う」を一貫した体系として構築し、文明として合理的な方向性を探っています。短期的利益ではなく、持続可能な宇宙利用の姿を長期的に描くことを重視しています。

また、月・小惑星などの**模擬物質「シミュラント（Simulant）」を精密に再現し、大量に提供できる体制を整えている**点も、本機構の大きな特徴です。化学組成や粒度を正確に再現したもので、国内外の研究機関や企業から提供依頼が寄せられ、技術実証や装置開発の基盤として活用が進んでいます。

### 科学・社会・産業をつなぎ 持続可能な宇宙利用を

人材育成では、社会人博士を含む多様なキャリアの方々に参加できる環境づくりを進めています。科学だけでなく、ビジネス、法制度、国際交渉を理解した人材を育成し、日本発の科学と技術を基盤に、**持続可能で節度ある産業化へつなげたい**と考えています。今後はこうした取り組みを踏まえ、宇宙にある物質を別の天体へ移送する技術実証にも挑戦します。

**宇宙には、まだ誰も活かしきれていない物質と環境が広がっています**。若い研究者や多様な専門の方々を持つ発想が、この新しい領域を切り開きます。幅広い視点からぜひ一緒に議論し、人類に資する宇宙資源開発を切り拓く仲間が増えていくことを願っています。



#### 宮本英昭

宇宙資源連携研究機構長  
工学系研究科教授



キックオフは昨年5月に工11号館HASEKO-KUMA HALLで行われました。



CSRIが開発する月・小惑星の模擬物質「シミュラント」。研究機関・企業が宇宙環境下の検証に利用する重要な基盤材料。

\* Ethical, Legal and Social Issues : 倫理的・法的・社会的課題

# 150周年記念チャリティコンサート・プレイベント対談 「安田講堂の歴史と未来」

東京大学150周年記念のチャリティ企画「安田講堂で奏でる〈イマジンコンサート〉」(2月15日開催)。そのプレイベントとして、1月19日、歌手の加藤登紀子さんと人文社会系研究科の鈴木淳先生、津田敦理事による対談が行われました。東大紛争を中心に安田講堂の歴史を振り返り、未来への思いを語りました。

## 1968年の分断の記憶

1925年に竣工した安田講堂。戦時、戦後を経て、1960年代には東大紛争の象徴的な舞台となりました。1969年1月には、全学共闘会議によって占拠され、立てこもっていた学生を機動隊が排除。1968年の卒業式ボイコットでは安田講堂前の座り込みに参加した加藤さんは、激動の時代を振り返り、「60年安保の頃から、底なしの虚しさ」を感じていたと話しました。本当の敵は大学や機動隊ではないのに、目の前に立ちはだかる相手に石を投げる。その虚しさ。そして「喧嘩する必要は何もないのに、分断させられてしまう悲劇」に言及。「傷跡を残したことに対して、私たちはどうすれば良かったんだろうかという問いが胸に残り続けている」と語りました。

その安田講堂で開催される公演を、ジョン・レノンの『イマジン』にちなんで「イマジンコンサート」と名付けたのは、世界で分断が深まるなか、もう一度、世界が一つにつながるビジョンを皆で生みだそう、という思いからだと言明した加藤さん。安田講堂建設のために寄附した実業家、安田善次郎さんは、レノンの妻オノ・ヨーコさんの曾祖父だという繋がりにも触れました。

## 音楽から未来を考える

東大百五十年史の編纂に携わる歴史学者の鈴木先生は、1987年に完成した『東京大学百年史』にも



### コンサートプログラム(2/15)

挨拶：津田敦理事・副学長

●公演(第1部)：  
東大同窓生オーケストラ  
ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」with 横山幸雄  
トークセッション：「芸術と東大「国境のない世界を実現できたら」」  
(加藤登紀子、佐藤健二執行役・副学長、河村知彦執行役・副学長)

●公演(第2部)：  
加藤登紀子 with 東大同窓生オーケストラ  
無垢の砂、時には昔の話を、さくらんぼの実る頃、愛の讃歌ほか

ピアニストの横山幸雄さんがゲスト出演し、東大同窓生オーケストラとともにラフマニノフの「ピアノ協奏曲第2番」を演奏。ラフマニノフが愛用したスタインウェイ社製ピアノでの演奏で、調整・修復を終えてから初めての披露目となりました。

東大紛争は書かれていると紹介。ただしそれは淡々とした叙述にとどまると指摘し、「紛争で様々な立場を取った人たちが大学に残るなか、大学として正面切って振り返りにくいテーマだったのではないかと見解を述べました。そのうえで、現在取り組んでいる150年史では、書き手のある程度の主観性を入れてもいいのではないかと、その考えを語りました。「多様な視点があってもいい。一つの物語にしないことこそ大学の価値だ」と話しました。

チャリティコンサートの開催については、「東大紛争は、今の学生たちにとっては記憶にない出来事。教員にとっても直接の経験から離れた話になっている。何だったのか、どんな価値を見いだせるのかを考える機会が必要で、安田講堂で加藤さんが語ってくれることに大いに期待している」と語りました。

2027年に150周年を迎える東大、今年で101年目を迎える安田講堂。そして東大紛争から50年以上。進行役を務めた津田先生は、これら複数の時間軸が、安田講堂という一つの空間で重なり合い、音楽を通してどのようなメッセージが生まれるのかを楽しみにしている、と話して対談を締めくくりました。



東大出版会 6位 『まなみのレクレーション』(二浦篤, 東大出版)

生協書籍部 累積売上ランキング(2003~24) 1位 『統計』



# HMCと東大生協のコラボが進展中

大学で人気の本や『きずな』に出会えるVR空間も登場



2023年に結んだ包括連携協定を基盤に、HMCと東大生協の連携活動が進んでいます。昨年12月には、中央食堂をモデルにしたVR空間で書籍部の売上上位本を一覧できるVirtual Commonsの試みがスタート。本好きの大学構成員に訪れてほしい「書苑」と、両者の連携活動の中心について、当事者の皆さんの声をもとにお知らせします。



7位 『相対性理論入門講義』(風間洋一, 培風館) 8位 『振動・波動』(小形正男, 裳華房) 9位 『量子論の基礎』(清水明, サイエンス社) 10位 『演習化学系1学』(渡辺啓, サイエンス社)

学大門 『東京大学 東大出版会』 2位 『化学の基礎7講』(東京大学 東大出版会) 3位 『線形代数入門』(斎藤正彦, 東大出版会) 4位 『微積分分子』(難波誠, 裳華房) 5位 『基礎物理学1』

## 書籍部の売上上位の本を表示

HMCの「開かれた人文学のための文化資源デジタルプラットフォーム」プロジェクトと東大生協が共同で構築した、東大書苑Virtual Commons (書苑VC)。入ってみると、中央食堂を思わせるVR空間の壁に書影が並んでいます。カーソルを操作して近づくと題名や著者名などの書誌情報がポップアップ。本の選定は駒場と本郷の生協書籍部における年間売り上げに基づきます。「書苑VCでの表示は2022年~24年の上位各15点ですが、併設のコンパニオンサイトでは2003年以降のデータを各年100位まで見られます。大学生協の書籍売り上げが累積で見られるのは全国的にも貴重。さまざまな研究の題材にもなります」と語るのは、プロジェクト代表の中村雄祐先生。過去のプロジェクトで整備した中央食堂の3Dスキャンデータと生協の売り上げデータを組み合わせ、読書の契機となる空間を探るなかで考えたのは、2017年まで中央食堂の壁を彩っていた絵画のことでした。

「中央食堂をモデルにするなら、『きずな』はやはり欠かせません。作品のデジタルデータが残っていると聞き、宇佐美圭司さんのご遺族の許可をいただいて、特別な空間を作って展示しました。作品の前で東京藝大の平論一郎先生による解説文が読めます」  
 空間内には企画スペースもあり、現在は累計ランキングやジャンル別売上占有率のグラフが閲覧できます。将来的には若い研究者の発信の場とする構想もあるとか。  
 「大学院生が書籍部で本を買って読んで論文を書き、そこから書籍部に並ぶ本が生まれて……という回路を可視化したい。市場経済と学術が出会う場という想定です」  
 書影の更新、表示の改良を含めて今後の

拡張が見込まれますが、書苑VCだけ注目されるのは本意ではない、と中村先生。そこには、7年前から進めてきた連携の蓄積があります。発端は中村先生が東大生協副理事長に就任した2019年にありました。

## 構内で市場経済と触れられる場

「生協の皆さんと話すなかで、生協が大学をいかに支えているのかを実感しました。でも、皆謙虚で遠慮がち(笑)。せっかくだから何かいっしょと呼びかけたんです」  
 閉店後の店内を訪れるYouTube企画を皮切りに、共同でイベントを進めるなかで、両者の信頼関係は深まりました。連携の持続のために組織間協定を結ぼうと提案したのは、HMCセンター長の齋藤希史先生。「生協書籍部の売り上げデータは、東大生が何を継承しようとしてきたかを物語ります。書籍部はキャンパスの中で商品と文化を媒介する貴重な存在。HMCはともに歩みを進めていきます」  
 齋藤先生が命名したトークイベント「書苑閑談」も、2月で4回目を迎えています。



左から中村雄祐(人文社会系研究科)、竹原昌樹(東大生協本郷書籍部)、齋藤希史(人文社会系研究科)、笠原真理子(HMC)の各氏

## HMCと生協の歩み

2019年9月	本郷書籍部イブニングツアー	中村雄祐、竹原昌樹、鈴木親彦
2023年4月	リエゾントークⅣ 本とつきあう——『漢文の語法』復刊をめぐる	齋藤希史、田口一郎
2023年10月	リエゾントークⅥ 本とつきあう(駒場篇)——考えるための古典	齋藤希史、田口一郎
2023年10月	リエゾントークⅦ 奥深き「第二食堂建物」	松田陽、角田真弓、強谷幸平
2023年12月	東大生協とHMCが包括連携協定を締結	
2024年2月	書苑閑談1 国語教育と文学の架橋	出口智之、仲島ひとみ
2024年2月	ホームカミングデイイベント ただいま!奥深き「第二食堂建物」	角田真弓、強谷幸平
2025年9月	書苑閑談2 ゆっくり見るとのこと	北垣憲仁、新藤浩伸
2025年12月	書苑閑談3 東大書苑東大書苑VC&コンパニオンサイト	中村雄祐、竹原昌樹、鈴木親彦、笠原真理子
2026年2月	書苑閑談4 言葉を奏で、音楽を読む	林信蔵、中村翠、川上啓太郎



書籍部の売場に椅子を置き、売っている本に囲まれながら語るのが「書苑閑談」スタイル。

東大書苑Virtual Commons <https://ch-suzuki.com/bookgarden.hmc/> ※協働プロジェクト・メンバーの鈴木親彦先生(群馬県立女子大)のWebサイトを利用して公開



## 海と希望の学校 — 震災復興の先へ —

第42回

大気海洋研究所と社会科学研究所が取り組む地域連携プロジェクト——海をベースにローカルアイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み——です。東日本大震災からの復興を目的に岩手県大槌町の大気海洋研究所・大槌沿岸センターを舞台に始まった活動は、多くの共感を得て各地へ波及し始めています。

### 「気」を込めてまだまだ先へ!

本連載も今回で最終回です。この連載は2019年4月より「海と希望の学校in三陸」というタイトルで始まりましたが、「海と希望の学校」の活動が奄美地方をはじめとした全国各地に広がっていくにしたがい、2023年4月より現在の「震災復興の先へ」へと変わっています。一方で本連載の前身であり、東日本大震災で被災した岩手県大槌町周辺の様子や、そこで行われていた活動を紹介した「ひょうたん島通信」の連載が開始されたのは2012年1月のこと。この2つの連載を合わせると今回で90回となります。これらの連載には私も何度か寄稿させていただき、「これは」という出来事を紹介させていただきましたが、多くの寄稿者のそれらの想いを並べてみると一つの時代の記録としての価値を感じさせるものとなっています。

最終となる今回に紹介したいのは2025年9月に誕生し、第40回でも紹介された「三陸ふるさと社会協創センター」の活動です。この三陸沿岸部は東日本大震災による甚大な被害からの厳しい道のりを歩んでおりますが、同時に日本社会の急激な変化と気候変動にもさらされています。沖合では黒潮の流路が変動し、世界で最も水温の上昇幅が大きい地域と

して報道されたことも記憶に新しいのではないかと思います。新しいセンターは産学官民の協力の下「三陸沿岸の知見・ニーズ・社会課題を一元的に集約する沿岸社会のシンクタンク」となり、これらの困難に対応していくことを目指しています。

その活動の一環

として、今、私たちが取り組んでいるのは安価なブランクトン観察装置の開発と普及です。単なる製造業の振興だけではなく、沿岸部の漁場環境に対する市民による監視網の整備、得られた情報を生業に生かすための海洋リテラシーの向上を企図していますが、その背後には地域の方々「おらほの海」の現在を知ってもらい未来を共に考えたいという想いや、なにより大人にも子供にも観察することや研究活動の楽しさを感じてもらいたいといった、「海と希望の学校」の核となった気持ちも込められています。まだ規模も小さく小さな一歩を踏み出したところですが、今後東京大学の多くの部局と連携し、活動の幅を広げていきたいと考えています。

大槌町城山公民館からの風景（上2011年5月、下2026年2月）。「ひょうたん島通信」第1回には連載開始直前の2011年12月に撮影された写真が掲載された。現在は復旧に伴う工事は見られなくなったものの、空き地が多くみられる。



大気海洋研究所  
附属国際・地域連携研究センター  
地域連携研究部門 准教授

福田秀樹



津田敦理事に看板に込めた想いを語る兵藤晋所長（左）

写真は第40回で掲載された「三陸ふるさと社会協創センター」の看板の裏側ですが、そこには兵藤所長の「気」が込められています。「所長はどんな気を込め、私はどんな気を込めるのだろうか？」と考える日々ですが、「海と希望の学校」もさまざまな関係者がそれぞれの気持ちを込めたことで多くの広がりを見せました。この連載を振り返っていただければ、多様なゆえの広がり込められた「気」の流れを感じていただけるのではないかと思います。新センターの活動もそんな「気」に満ちた広がりのあるものにしていきたいと考えておりますので、引き続きご支援をいただければと存じます。



ブランクトン観察装置の製作に向けた打ち合わせ。岩手県ふるさと振興部科学・情報政策室と岩手県水産技術センターの方々と筆者（左側一番奥）



「海と希望の学校」公式 X (@umitokibo)

バックナンバー→[www.u-tokyo.ac.jp/ja/society/aid/sanriku.html](http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/society/aid/sanriku.html)

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）



# UTokyo Brand Studio

## 実験中!

第1回

コミュニケーション戦略本部  
副本部長 猪熊智子

### 学生とともに東大ブランドを発信

昨年7月から「本格稼働」したブランドスタジオ。「本格稼働」、つまり東京大学のブランド発信を本格的に強化するため、まず着手したのが学外のトップクリエイターの協力を得ることでした。アドバイザーとして樋口景一さん、瀬川浩樹さんをお迎えし、ブランドスタジオで制作するもののクオリティを高めるための体制を整えました。

その次が学生スタッフの公募でした。国内外に東大の魅力を発信するうえで、学生ならではの視点やアイデアが欠かせないと悟ったのは、海外の一流大学のSNS投稿を見たときでした。生き生きとした学生たちの姿やキャンパスライフが何ともステキに発信されているのを見て、学生の力が不可欠だな、と……。

書類選考、面接を経て、10月初めに第1期メンバーが決まり、早速ホームカミングデイで活躍してもらいました。目下、トップクリエイターの指導を受けながら、ブランディングやアイデア発想を学んだり、コピーライティングやグラフィックデザインなどのスキルを磨く場を設けたりして力をつけてもらっています。

学生スタッフのモチベーションやスキルの高さには驚かされますが、オトナの役割としては、東大のブランディング業務を通じた学生スタッフのエンゲージメント向上、できれば何かしら心に残る仕事や場を作りたいと考えています。

コミュニケーション戦略本部では、150周年に向けて「Challengers for Changes」(C4C) というスローガンの下、新しいブランドコミュニケーションを展開中です。威厳や権威といった言葉で語られがちな東京大学ですが、やや固定化した従来のブランドイメージを超えて、変革に取り組むリアルな姿や熱量が、より魅力的に世の中に伝わるようなコミュニケーションの実現を目指しています。

このコラムでは、ブランドスタジオのチャレンジを、学生スタッフの活動報告を中心にお伝えしていきます。読者の皆さまには、温かい目で見守っていただけましたら幸いです。



昨年10月のホームカミングデイにて。手で示しているのはC4Cのサインです。

# 蔵出し! 文書館

The University of Tokyo Archives

ぶんしよかん



第60回

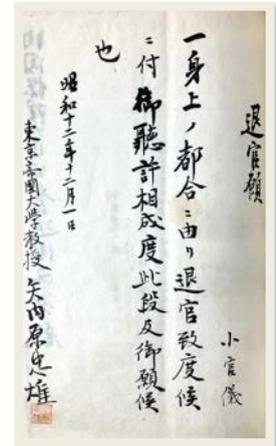
収蔵する貴重な学内資料から  
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

### 「職員進退」の世界

当館では「職員進退」(S0018)という資料群を所蔵しています。既に本コラム第25回(『学内広報』第1533号)でも、この資料群に登場する東大の女性職員について紹介しましたが、明治初年から現代に至るまでの、東大やその前身校の人事記録が綴られています。

1933年の記録(S0018/SS01/0126)を見てみましょう。農学部附属演習林の嘱託となった荻原貞夫さんは、演習林の「面積地形等ノ測量ニ関スル業務」に従事し、また大沼製治さんは、「構内ノ盗難防火其他取締等」のため巡視に採用されています。大学の歴史といえど教員や学生に目が向きがちですが、東大がいかにも多様な人びとによって支えられてきたのかがわかります。そうした言わば「無名」の人びとの足跡もたどることができる点が、「職員進退」の大きな魅力だと感じます。

他方で「職員進退」には、教科書に載るような事件についての資料も含まれます。これは、教授・矢内原忠雄(経済学部)直筆の辞表です(S0018/SS01/0147)。矢内原は日中戦争下の1937年、政府や戦争への批判的言論が問題視されて東大を辞職させられました。興味深いのは、「職員進退」には、その際に矢内原に対して、文部大臣の承認のもと「職務勉勵」として賞与が支払われた記録が残されている点です。賞与額2200円の算出根拠となる計算メモが綴じられ、そのうち上限支給額1600円を超過する600円については、「年末賞与」として別途支給する手続きをとった旨が記されています。当時、退職する教官等に賞与を支給するのは通例のことで、これもその慣行を踏襲したに過ぎないのでしょうか。ただやはり、矢内原の追放という思想的事件と、賞与額を計算し、規則に基づいてそれを支給するという事務的な営みとの間には、大きな落差を感じます。しかしその奇妙な結合こそが、職業としての研究者という存在を成立させているのかもしれない。「職員進退」は、そうした世界の一部を示しているのです。



(助教・立花孝裕)

## ワタシのオシゴト 第237回

RELAY COLUMN

文学部・人文社会系研究科 学生支援チーム 後藤晏奈

## 文学部を楽しんでください



時間帯によっても表情が変わる会議室にて

と、引き継ぎの際に前任から言われて始まった文学部での日々は、早いものでもうすぐ二年が経ちます。重厚な石造りの建物、異国の石像が飾られた階段、壁一面が本棚になった会議室、現役の黒電話、展示室「文学部の扉」など、文学部にはわくわくせずにはいられないものがたくさんあります。そしてなにより、優しくあたたかく見守ってくださる先生方、職員の方々にたくさん助けをいただきながら働けていることを光栄に思います。

私は学部の履修、成績、カリキュラム関係を担当しています。現在はおおよそ完成した来年度の授業計画をもとに、教室割り振りや便覧作成の真っ只中。文学部は必修科目が少なく、また毎年開講科目の編成が大きく変わるため履修者数の予測が難しく、教室割り振りは難航する業務のひとつですが、時々目に入る講義題目に興味を惹かれつつ、学生や先生が円滑に新学期を始められるように準備に励んでまいります！



2026年初観劇！退勤後30分で東京宝塚劇場へ

得意ワザ：足音で家族の帰りがわかる（犬？）  
 自分の性格：人より歩くのが早く、食べるのが遅い  
 次回執筆者のご指名：砂川実緒里さん  
 次回執筆者との関係：前部署（人事部）の前任  
 次回執筆者の紹介：文武両道で笑顔がとっても素敵！

## デジタル万華鏡 第50回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

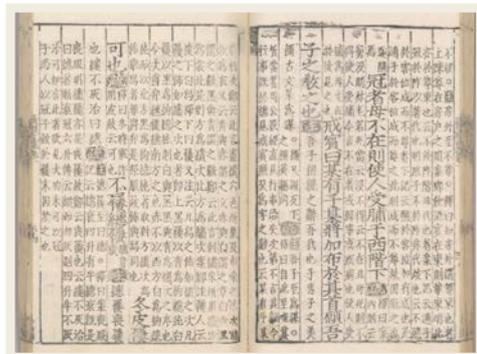
附属図書館 アジア研究図書館  
研究開発部門 助教

板橋暁子

## 漢籍コーナー貴重書コレクション

漢籍コーナーは赤門総合研究棟の6階に所在し、文学部の6研究室により運営されています。よって、附属図書館に属するアジア研究図書館とは本来部局が異なりますが、2024年度から本格化した分館分室体制により、アジア研究図書館の「分室」が漢籍コーナーに設置されたことで、部局を越えた協力関係が始まりました（なお、「分館」は東洋文化研究所図書室に設置されています）。協力が実を結んだ形のひとつが、アジア研究図書館デジタルコレクションの一部である漢籍コーナー貴重書コレクションです。設置されてから日が浅く、今なお構築の途上にあります。少しずつでも拡充をめざして取り組んでいます。

明・清・朝鮮刊本と清代の鈔本から成る漢籍コーナー貴重書は、全32点と数は限られていますが、1点あたり数十冊にのぼるものも多く、書架上占めるスペースは小さくありません。32点の中で最初のデジタル化対象となったのは、とびぬけて大部である通称『閩刻十三經註疏』、すなわち明代嘉靖年間の福建で李元陽により刊行された、13種類の経書（儒教經典）の本文（經文）と二段階の注釈（注文・疏文）を合刻したものです（2026年2月現在で公開されているのは、13種類のうち5種類）。日本国内にはほかにも所蔵機関が複数あり、東大総合図書館の青洲文庫にも所蔵されています。ただ、青洲文庫本は『孝経註疏』を欠いており、また、国立公文書館ほか学外機関で所蔵されている『閩刻十三經註疏』にも闕本が多くみられます。それに対し、漢籍コーナー貴重書の『閩刻十三經註疏』は、錯簡等はあるものの完全に近い形で保存されており、このたびのデジタル化により、学内外・国内外で広く参照されることを願うものです。今後は、清代後期考証学の名著『癸巳存稿』の稿本など、より希少な漢籍の公開も控えています。



『閩刻十三經註疏』の一部、『儀礼註疏』の錯簡部分

<https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/collection/kanseki>

## インタープリターズ・第222回 バイブル

東京カレッジ 准教授 江間有沙  
科学技術コミュニケーション部門

### ペーパーレスオフィスの神話、 その先で増えるモノ

『ペーパーレスオフィスの神話——なぜオフィスは紙であふれているのか』は、2002年に英語で書かれ、ペーパーレス化が進むはずの時代に、なぜ紙が減らないのかを描いた一冊である。私のお気に入りの本だ。

それから20年以上が経った2026年、ペーパーレス化を確かに「本気で」進めようとしている組織もある。最近、AI導入の現場を参与観察する中で、オフィス移転を機にフリーアドレスを導入し、共有棚、文具や個人ロッカーの設計まで含めて、組織としてペーパーレスを徹底しようとする自治体や企業に出会った。

ただし実際のところは、机の上をよく見ると、紙や本が積み、自分の城が築かれていることも多い。ペーパーレスは進んだのかと問われれば、答えは「ある程度はイエス」だろう。

しかし現場を見ていて強く印象に残ったのは、紙が減った代わりに、別のものが増えているという点だ。

その正体は端末である。

特に自治体では、セキュリティの関係から内部ネットワーク専用のパソコンとインターネット接続用のパソコンを分けて運用する場合があります。結果として二台持ちが常態化している。パソコンが増えるものにはマウスもある。そこにiPadでしか動かないAIアプリ、私用と公用スマホが加わり、机の上には複数の端末やモニター、パソコン付属品が並ぶ。

さらに、現場を見てなるほど、と思ったのは、増えるのは個人の机の端末だけではない、ということだ。なんとネットワークごとに分かれたプリンターやスキャナーも増えていく。感覚としては、現在の問題はもはや「紙がなくなる」という話ではない。紙は減っている。そして端末が増えている。

『ペーパーレスオフィスの神話』が描いたのは、紙が消えないオフィスだった。もし私が今、この現状を一冊の本にするとしたら、『ペーパーレスオフィスの神話、その先で——なぜオフィスは端末であふれているのか』と名付けるかもしれない。

紙が減ったその先で、何が増え、何が残ったのか。働き方はどのように変わったのか。人々の働き方は楽になったのか。その問いは、AIやDXの時代にこそ考え続ける必要がある。

科学技術インタープリター養成プログラム  
<https://scicom.c.u-tokyo.ac.jp/program-2>

## ききんの き

寄付でつくる東大の未来

第76回 社会連携部 ROZYKULYYEVA JENNET  
ディベロップメントオフィス

### 全学で広がる支援の輪、 最大の成果達成！

オンライン上で活動資金を集める国内最大の大学チャリティーイベント「Giving Campaign」。本年度は2025年10月、東京大学から33プロジェクトが参加し、研究・教育・課外活動を横断した全学的な取り組みにより、9,913票の応援と476万円の寄付金を獲得しました。

本キャンペーンは、応援ボタンで気軽に意思表示ができる参加型の仕組みで、応援数が多いプロジェクトはパートナー企業から、より多くの資金を獲得することができるのが特徴です。東京大学基金に特定基金を設置している16の研究プロジェクト、3つの学生主体プロジェクト、14の運動部が参加し、協賛金に加え、特定の条件を達成したプロジェクトには企業賞、日々の活動を評価するチャレンジ賞が贈られました。大きな成果の背景には、具体的に共感しやすいストーリー発信、研究室やOB/OGネットワークの活用、そして活動報告等の継続的なコミュニケーションがありました。その結果、初参加の15プロジェクト（45.4%）を含む多くの団体から「参加してよかった」という声が多数寄せられています。中でも「未来ビジョン研究センター」は前年度比18倍、「理学部2号館を救え！」は8倍の寄付件数を記録し、他の初参加プロジェクトも2024年度の年間寄付獲得実績を、わずか10日間で上回る結果となりました。

受賞面では、企業賞4件、チャレンジ賞6件を獲得。「FoPM支援基金」がDeNA賞、「RoboTech支援基金」がSHIFTER賞・ソフトバンク未来創造賞、「国際水産研究教育基金」がソフトバンク未来創造賞など、幅広く評価され、応援獲得数の上位3位は東京大学漕艇部支援基金（2,304票）、RoboTech支援基金（1,156票）、軟式野球部活動支援基金（894票）となりました。

本キャンペーンは、寄付の獲得にとどまらず、学内における多様な活動を可視化し、新たな交流や協働を生み出す機会ともなりました。来年度も様々な形で東京大学への支援の輪を広げる活動を推進して  
Giving Campaign 2025  
特設サイトはこちら→



東京大学基金 <https://utf.u-tokyo.ac.jp/>

**トピックス** 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
1月15日	本部学生支援課	水泳部競泳陣の松本選手が日本学生選手権で2位入賞!
1月15日	新世代感染症センター	「新世代感染症センター基金」を設置 寄付募集を開始
1月16日	本部労務・勤務環境課	「東京大学教職員の倫理保持のための規範」の制定について
1月19日	新領域創成科学研究科	第8回日本医療研究開発大賞における内閣総理大臣賞受賞のお知らせ
1月20日	広報室	研究紹介からRRI教材へ進化したゲーム『ひみつの研究道具箱』＝松山桃世   合理より情熱を選んだ伝説の格闘ゲーマーは業界の氷河期をも解かず＝ときどき   全力でその瞬間の「勝ち」を取りに行く異色の経歴の麻雀プロ＝新倉和花 / 広報誌「淡青」51号
1月21日	生産技術研究所	東大生研ウェブマガジン 特集記事を公開 (2026年1月)
1月22日	情報理工学系研究科	河原林健一教授が「ACMフェロー」に選出
1月23日	附属図書館	「オープンアクセスハンドブック第3版」英語版を公開
1月25日	コミュニケーション戦略本部	本学教員の逮捕を受けて (総長メッセージ)
1月26日	大学総合教育研究センター	新設備「スマート・スタジオ」を大学総合教育研究センターが開設
1月30日	本部入試課	令和8 (2026) 年度第2次学力試験出願状況速報
1月30日	空間情報科学研究センター	共創型コンソーシアム「デジタルアドレス・オープンイノベーション」が発足
2月2日	物性研究所、大気海洋研究所、新領域創成科学研究科	第16回「未来をのぞこう!」を開催
2月2日	本部コミュニケーション戦略課	懲戒処分の公表について
2月4日	本部コミュニケーション戦略課	令和7年度退職教員の最終講義3月開催分のお知らせ
2月4日	本部コミュニケーション戦略課	令和7年度退職教員の紹介
2月4日	本部入試課	令和8年度前期日程試験第1段階選抜合格者発表のお知らせ (予告)

## CLOSE UP 記者会見を実施



東京大学は、社会連携講座等をめぐる不祥事について、1月28日に安田講堂で記者会見を開催しました。藤井輝夫総長と相原博昭理事・副学長 (病院・教員人事担当) が、教育研究機関として社会の信頼を著しく損ねたと

(本部コミュニケーション戦略課)

して謝罪。外部調査チームの弁護士とともに今回の事案について説明し、当該教員の処分、再発防止策等を紹介しました。約2時間半に及ぶ質疑応答の後、藤井総長は不退転の決意でガバナンス改革に取り組むと述べました。

## CLOSE UP 水泳部競泳陣の松本選手が日本学生選手権で2位に (本部学生支援課)



接戦のなか、後半の粘りを見せた松本選手。死闘を終え、喜びを爆発させました。

9月4日～9月7日に江東区の東京アクアテイクスセンターで開催された第101回日本学生選手権水泳競技大会において、水泳部競泳陣の松本恭太郎選手 (工学部・4年) が男子100m平泳ぎで第2位に入賞しました。私立大学の強豪校がひしめく中、国公立大学所属選手としては異例の快挙です。

決勝では、前半から積極的なレース展開を見せ、50mの折り返しを2位で通過。後半も

大接戦となりましたが、そのまま2位でフィニッシュしました。記録は1分00秒29で、予選でマークした自己ベストをさらに0.3秒更新する結果となりました。

松本選手は「ずっと憧れていた場所に立つことができ幸せでした。この舞台を目指して切磋琢磨する中で大切な仲間もできて充実した大学水泳生活を送れました」とコメントを寄せています。

## UTokyo 上野博士とハチ公の絆

歴史的瞬間が、ついに完成! 弥生キャンパスの農学正門に佇む上野英三郎博士とハチ公の銅像を制作した彫刻家・植田努氏による原作の造形を忠実に再現した1/6サイズのレプリカが新登場。博士に駆け寄り寄りかかると、再会の喜びがあふれ、ふたりの深い絆が表現されています。東京大学にゆかりのあるこの感動のシーンをお手元に迎えてみてはいかがでしょうか。(田)



上野英三郎博士とハチ公像レプリカ (1/6サイズ)

サイズ:  
W34×D20.5×H35 cm  
重さ:  
約3.5kg  
120,000円 (税込)

UTCCからのお知らせ



→オンラインストア



**CLOSE UP 新しい発信空間「スマート・スタジオ」を開設** (大学総合教育研究センター)



このスタジオから新しいコンテンツと新しいコミュニケーションを発信します。

大学総合教育研究センターは、新しい設備「スマート・スタジオ」を開設しました。会議室であり、応接間であり、書斎でもある「スタジオ」です。じっくり考える空間でありつつ、思考を練る過程をもれなく記録し、デザインして整え、外界へ発信する、クリエイティブな空間です。ZOOM会議、ゼミ形式のハイブリッドウェビナー、伝達力ある映像プレゼンテーション、対談、インタビューまで、コンテンツのすべてをアップデートします。

照明は600wのLEDライトを常設し、講師

をくっきりと映し出します。整ったインテリアゆえに背景をボカす必要はなし。グリーンバック背景を用いて資料や映像をリアルタイムで合成することもできます。大型プロンプターが導入されているので手元のメモに視線を落とす必要はありません。新デバイス「ライトボード」を活用すれば、より伝わる講義映像を作れます。このスタジオを学内外の方々とともに活用し、100年後まで生きる大学発の高解像度オープンエデュケーションコンテンツを発信していきます。



**CLOSE UP デジタルアドレスの共創コンソーシアムが発足** (空間情報科学研究センター)



住所のDXを進めようと手を組んだ、DAOI共創パートナーメンバーの皆さん。

1月23日、業界の枠を超えて住所の課題を解決することを目的とした共創型コンソーシアム「デジタルアドレス・オープンイノベーション (DAOI)」が発足しました。

DAOIは、共創パートナー (アパグループ、アフラック生命保険株式会社、GMOメイクショップ株式会社、株式会社セールスフォース・ジャパン、Packcity Japan株式会社、日本郵便株式会社、楽天グループ株式会社、東京大学) から成り、オブザーバーとして、総務省、デジタル庁が参加します。産業界・学術機関・行政機関が連携することで、社会全

体が抱える「住所にまつわる課題」を解決し、持続可能な社会の実現にも貢献することを目指すものです。社会での「デジタルアドレス」の実用化に向けた実証実験や活用事例の創出、利活用に関する知見の共有、技術や制度のあり方の検討・整備等を共同で行います。

DAOI設立の記者発表には、空間情報科学研究センター長の関本義秀教授が参加しました。住所、地名などをコンピュータで取り扱いやすくする取り組みは、当センターでは大変長い歴史があり、積極的に連携を深めています。



**CLOSE UP 岩手県奥州市所蔵「留守家文書」史料画像を公開** (史料編纂所)



将軍家政所下文  
建治2 (1276) 年閏3月11日

史料編纂所は、岩手県奥州市が所蔵する古文書「留守家文書」の画像のWEB公開を開始しました。留守家文書は、鎌倉時代の初めに源頼朝から陸奥国留守職と奥州総奉行に任じられ陸奥国に下向した伊沢家景の子孫に伝わった文書群(約2,000点)です。中世から近世初期の文書107件が1995年に重要文化財に指定され、指定外の近世・近代文書も目録が作成されて利活用が可能となっています。

史料編纂所では1978年に整理を行い、2024年度に留守家文書の調査・撮影を行い

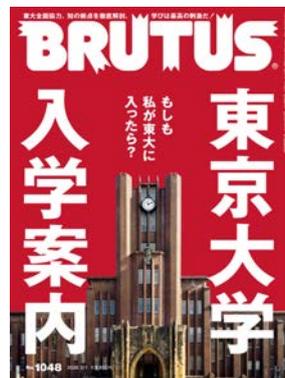
ました。そして、2025年12月に奥州市と覚書を締結したことにより、2026年1月から留守家文書の一部の目録データと画像データをWeb公開しました。

留守家文書は、文書の多くが保存のために卷子に装丁されており、一度に複数の文書を同時に閲覧することが困難でしたが、今回デジタルアーカイブ化されたことにより、より手軽に古文書を利活用することができるようになりました。史料編纂所の「Hi-CAT Plus」データベースから閲覧が可能です。

**『BRUTUS』誌が東京大学を大特集！～文学部の卒業生が編集に尽力～**

マガジンハウスが1980年から刊行しているライフスタイル誌『BRUTUS』が、2月16日発売の第1048号で東大を特集しています。その名も「東京大学入学案内」。「もしも私が東大に入ったら?」という設定で68ページにわたって展開されるBRUTUS流の入学案内です。登場するのは、藤井輝夫、香田啓貴、四本裕子、瀬地山角、森畑明昌、松方冬子、國分功一郎、斎藤幸平、河東泰之、森脇可奈、渡邊英徳、戸常寿、小林武彦、村上健太郎、沖野郷子、小島武仁、榎屋友子、塚本磨充、鈴木寛、東原和成、マイルス・ベニンントン、熊谷晋一郎、田中隆一、三反畑修、野澤祥子、陳捷、福永

真弓、村田茂穂、竹内昌治、川合覚、塩澤真人、小島浩之、大澤啓、海部陽介、松原始の諸先生、さらには、レゴ部、Orist、襖クラブ、路線図研究会、UTFR、多浪交流会、応援部、B&W部、相撲部、硬式野球部、食堂コマニ、KOSS、総合図書館、三鷹寮、GATEWAY Campus、カオスキャン、帝大下水マンホール……。ある日ふらっと安田講堂に現れて企画を提案し、連日の取材活動を経て形にしたのは、編集者の村田健人さん。学生時代はWebメディア「UmeeT」で活躍した、文学部美学芸術学研究室出身の卒業生です。未見の人は急いで生協書庫部へGo! (急げない人はKindleで)





## 研究室の「当たり前」を見直す

「何でこの人、こんなに怒っているの?」と、テレビに映る選挙候補者の街頭演説を見ていた5歳の娘が聞いてきた。実際は、全く怒ってなどいなかったのだが、険しい顔をして大きな声で喋り続ける人=怒っている、と子供が推定するのも納得である。

スムーズなコミュニケーションの裏には、大抵の場合、両者間で共有されている文脈や背景、常識などがある。言い換えれば、そうした暗黙の共通理解がない場合、コミュニケーションにすれ違いが生じることがある。特に、共通理解があると思いついでいる時に、事態は深刻になりやすい。

学生とはこういうもの、指導教員はこうあるべき、など、自分が育ってきた環境の中で「当たり前」になっていることを考え直す機会は、日常の研究生活では減多にない。一方で、ハラスメント撲滅の時代から多様性や個人の尊重の時代へと進んでいく中で、何をハラスメントだと感じるか、学生や教員がお互いに対して何を期待するか、についても時代と共に大きく変化し、多様化している。だからこそ、一人一人が自分の「当たり前」を見

直すことは、より良い研究環境を実現する鍵となる。

私の研究室では卓越大学院FoPMのプログラムの一つである「研究室ローテーション」により、この数年間で数名のプログラム生を受け入れた。異分野の学生との議論は、複数の新しい研究に繋がり、学術面での成果も大きかったが、何より、他の研究室に属する大学院生との交流を通して、研究室運営や研究室内のコミュニケーションのあり方なども、実に多様であることに気付かされた。私自身にとっても、プログラム生および私の研究室の学生にとっても、それぞれの「当たり前」を見直す貴重な機会となった。

いずれ研究室の運営主体となりうる学生が、自分の育った環境しか知らないというのでは、現代の大学院教育としては心許ない。すべての大学院生に対し、1週間程度でも良いので、別の研究室の研究環境を体験・見学することを必須化してはどうだろうか?

佐々田 慎子  
(数理科学研究科)